

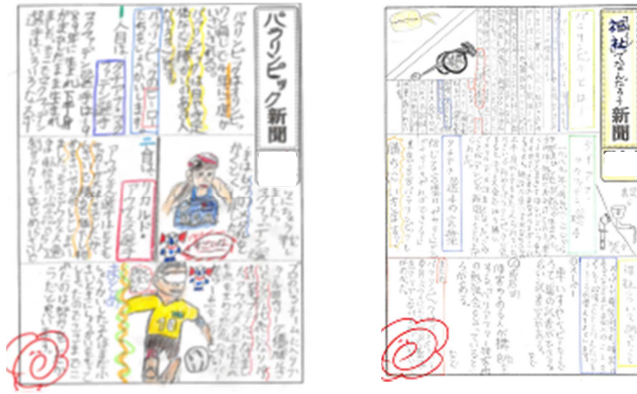
2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」
事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 茨城県 】

学校名【 土浦市立真鍋小学校 】

1 実践テーマ	Ⅲ
2 実施対象者 (学年・人数)	土浦市立真鍋小学校 5年生145名, 6年生144名, 合計 289名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (総合的な学習の時間) ② 行事名 (ふれあい祭) ③ その他 (特別支援学校との交流) (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間「考えようみんなの幸せ～パラリンピックを通して～」において、パラリンピアンからの講話から障害者スポーツの実際を知り、誰もが幸せに生きられる共生社会について考える。(5年生) キャリア教育の一環として、ハンディを抱えながら夢の実現に向けて努力するパラリンピアンからの講話を聞くことにより、自己の能力を生かしてよりよく生きようと努力する意識を高める。(6年生)
5 取組内容	<p>1 事前学習</p> <p>(1) 「福祉って何だろう？」福祉について考える。</p> <p>(2) パラリンピック教育用教材「I'm POSSIBLE」を活用して、パラリンピックについて学ぶ。</p> <p>(3) 書籍やインターネット等を活用しパラリンピックについて調べる。</p> <p>(4) パラスポーツを体験する。 体育の授業で、シッティングバレーボールを体験する。</p> <p>(5) 道徳との関連 「ノンステップバス」、「駅前広場はだれのもの」</p> <p>(6) パラリンピックについて新聞にまとめる。(個人)</p>



2 オリンピック・パラリンピック推進事業

パラリンピアン講演会から学ぼう。

(1) 日時 令和元年9月11日(水)

14:00~15:00

(2) 会場 土浦市立真鍋小学校 体育館

(3) 講師 パラ・アルペンスキー LW2

三澤 拓 選手

(4) 演題「できるかできないかではなく やるかやらないか」

- ・6歳の時に事故で片足を失うが、母の「何でもできるから大丈夫。」の言葉を信じ、あきらめることなく様々なスポーツにチャレンジしてきた。中学生では、野球部のピッチャーで打順は4番、キャプテンを務めた。さらに英語の弁論大会で全国大会に出場するなど、スポーツだけでなく演題の通り「できるかできないか」ではなく「やるかやらないか」の不屈の精神が伝わってきて、児童達は驚いていた。「まずやってみる→工夫して挑戦してみる。人とちょっと違うところは個性。足を失ったからスキーに出会えた。いろいろな特徴があるので、たくさんの人とコミュニケーションをとり自分の個性を見つけて頑張れば、周りの人が応援してくれる。まずは挑戦することが大切。」というメッセージを、児童達はうなずきながら受け止めていた。義足を外して見せてくれ、片足で体育館のステージから飛び降り、しっかりと着地した体のバランスの良さに児童は驚いていた。



3 東京パラリンピックに向けてのポスター作り

図工の授業で東京パラリンピックに向けてのポスターを1人1枚制作し、東京オリンピック・パラリンピックポスター展に応募した。



4 特別支援学校との交流会



5 ふれあい祭

- (1) 人権集会 (全校)
 児童から募集した人権
 マスコットの発表



- (2) 車椅子体験, インスタントシニア体験 (5, 6年 160名)



6 主な成果

- 福祉とはみんなの幸せを実現することだと気づいた。
- 事前にパラリンピック教育用教材「I'm POSSIBLE」を活用したことが児童のパラリンピックへのよりよい理解につながった。プログラムに沿ってクイズや映像、ワークシート等も工夫されているため、児童には分かりやすく、教師には効率よく

	<p>指導できる教材であった。特にブラインドサッカーのブラジル代表リカルド選手や陸上競技のアメリカ代表タチアナ選手について学び、生き方に感動していた。</p> <ul style="list-style-type: none"> •パラリンピアンからの講話から 「何でもあきらめなくて挑戦することが大切だと思いました。」 「できると思えばできるようになる。自分も挑戦したい。」 「片足がないことを言い訳にしないで、努力し続けるところに感動した。」 「体が不自由なことがあっても人とちがっていても個性。」 「一生懸命努力していれば、周りの人たちは応援してくれる。」 「自分もいろいろなことに挑戦していきたい。」 「今まではパラリンピックにあまり興味がなかったが、次の北京パラリンピックで三澤選手を応援したい。」 「このような人にあったら、ふつうの人のように優しく寄りそっていきたいと思った。」 お礼の手紙には、2022 北京冬季パラリンピックでの三澤選手の活躍を期待し、応援したいことをそれぞれの児童が書いていた。 •特別支援学校との交流では、子どもたちは始めどう接したらよいか戸惑っていたが、ゲームで交流するうちにお互いに打ち解け合い「もっと交流したかった。」という感想がほとんどだった。このことから、まず「知る」そして「ふれあう」ことが大切であることを学ぶことができた。(5年生) •障害者スポーツの観点から、誰もが幸せに生きられる共生社会について工夫し考えることができた。また自己の能力を生かしてよりよく生きようと努力する意識を高めることができた。
7 実践において工夫した点(事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> •パラリンピック教育用教材「I'm POSSIBLE」は“できないことImpossible”から”私はできるI'm possible.”のように、工夫することで“できる”に変えられることを効率よく教えられる良い教材である。よって事前に学年職員で研修し、視点や教える内容、動画の編集等を協力して行った。 •シッティングバレーボールや特別支援学校との交流、インスタントシニア体験等の体験活動を取り入れた。 •総合的な学習の時間の他に、道徳や体育そして図工等他教科との関連を図った。
8 主な課題等	<ul style="list-style-type: none"> •本校では今年度から5年生の総合学習に初めて福祉を取り入れたため、推進校の指定を受けてから、計画的に事業を進めていくことが時間的に難しい面があった。事後指導が十分に行えなかった。 •講師との連絡がメールのみで、遠征に行かれていた等の事情もあり、打ち合わせが大枠になった。
9 来年度以降の実施予定	<ul style="list-style-type: none"> •総合的な学習の時間(5 学年)においても福祉について学習し、共生社会について考えられるようにする。 •2020 年東京オリンピック・パラリンピックは福祉について学習する絶好の機会ととらえ、学習に位置づける。